

ミステリ読書案内

2022. 12. 16 発行元

第427号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

歴史・時代ミステリその8

第417号に続いて「歴史・時代ミステリ」の第8弾。『歴史ミステリ』と言うと、舞台は現在でも内容が歴史に関わっていればよい。『時代ミステリ』という、舞台がその当時で、歴史上の人物が活躍…??

時代ミステリの難しさ

小説を書くのはどんな作品でも大変な作業だが、『歴史』ましてや『時代もの』となると時代考証の作業が大きいのかかってくる。

「言葉遣い」はまあ許されるにしても、衣食住は当然当時のものを逸脱するわけには行かない。私たちのいる現在は電気で生活が当たり前で、自動車などの乗り物も各種存在する。でも、200年前となるとそうはいかない。夜になれば暗くなるし、馬に乗って移動できればよい方で、たいていは自分の脚で歩く以外にない。舗装道路なんてないし…。

今の若い人たちはお祭り以外に荷役に使われる馬や牛を見たことがないだろう。私は年寄りなので、子どもの頃はすぐ身近にいたものだが…。時代も変われば変わるものと言えよう。

時代ミステリの傑作と呼ばれる作品はいずれも時代考証は綿密に行われている。なおかつその時代に相応しい道具が使われていたりするのが読みどころである。今回取り上げた三作の作家も、時代ミステリの書き手としては定評があり、どの作品を読んでも感心させられる。よほど資料調べを徹底して行っているのだろうと実感できる。

鯨統一郎『とんち探偵一休さん 謎解き道中』

2003年祥伝社ノンノベルス。鯨統一郎の作品には、現代の人達が歴史を振り返って分析する形の歴史ミステリが多いが、本書は室町時代を舞台にした完全な時代ミステリ。『とんち探偵一休さん』の第一作は『金閣寺に密室』。本書はその第二作にあたる。

京都の建仁寺の小坊主・一休と問注所検視使官・新右衛門、建仁寺に寄宿する少女・茜の三人が東国に向けて旅を続ける展開。茜の両親を捜す物語。8つの短編が旅程に従って出てくる。難波、大和、伊勢、尾張、駿河、伊豆、相模、武蔵という具合。鯨統一郎らしい密室事件、建物の消失など本格謎解きが…。とんち一休さんの推理が冴えわたるか…。

泡坂妻夫『亜智一郎の恐慌』

1997年双葉社。最初は『野性時代』に載

せ、その後は『小説推理』に連載したものをまとめた短編集。『亜愛一郎』シリーズは現代もので3冊出版されているが、この『亜智一郎』はその先祖という設定。何代前なのだろうか。江戸時代末期の出来事として描かれている。亜以外の人物も『亜愛一郎』シリーズと関連を持たせているところが面白い。

亜智一郎は江戸城の雲見櫓に詰める雲見番。普段は一日中空を見て、雲を観察する役目。(雲を見るのは亜愛一郎も同じだけれども…)。なんとも暇そうに見える仕事なのだが、実は隠された役目があって…。それは將軍直属の隠密方で、幕末のペリーの来航、安政の大獄、桜田門外の変…と続く動乱の時期を乗り越えるための秘密組織なのである。雲見番四人衆。姿かたちが整っている亜が頭の役。大刀使いの古山奈津之助、甲賀流忍術の藻湖猛蔵、芝居好きの緋熊重太郎と特殊能力が揃った。第一話の『雲見番拜命』では、安政の大地震の日、將軍を見舞う大名達の中に將軍暗殺を狙う者たちが紛れ込んだ事件。第二話の『補陀落往生』では、藩主が大量殺人を行ったと噂が流れ、白杉藩に潜入して捜査する話。以下第七話まで収録されている。

田中啓文『大塩平八郎の逆襲』

2019年集英社文庫。『鍋奉行犯科帳』

シリーズと並行して書かれてきた『浮世奉行と三悪人』シリーズの第六作で、完結編となる本。両シリーズ共に江戸時代の大坂を舞台としており、田中啓文のストーリーテラーぶりが存分に発揮されている。

こちらの主人公は町人の公事を裁く民間の「横町奉行」の役目を果たしている竹光屋・雀丸。シリーズのここに至るまでに多方面に渡るもめ事をぎりぎりのところで上手に処理してきている。ところが、最終巻にあたる本書では更に大きな事件に発展していく。豪商の鴻池善右衛門が命を狙われるようになり、雀丸を支えていた「三すくみ」も窮地に陥る。要久寺住職の大尊は寺に火をつけられたのに奉行所から犯人と疑われ牢に繋がることに。口縄の鬼御前はその時の火事で家を失い、兄の危機を聞いて旅に出ることに。廻船問屋の地雷屋臺五郎は瀬戸物輸送の仕事を請け負ったのはよいが…その荷物というのは…。奉行所、大坂城代と騒ぎは大きくなり、とうとう揃って大坂から出立することになる。事件の後に見え隠れするのは過去に起きた「大塩平八郎の乱」のこと。そして、最後にはペリーの黒船まで登場して、いよいよ幕末の急を告げる展開に。